

近来、大都市を中心にした過密化対策解決のため、再開発論・都市改造論が盛んに論議され、その原因ともなり、結果ともなる土地問題・交通問題・騒音問題・排ガス問題など山積する諸問題の対策に、官民を問わず侃々諤々の有様は、まさに百家争鳴の観なきにしもあらずといえる。

こうしたことから、狭い国土に一億一千万人の人口をかかえる過密のわが国では、ついには海上都市建設案まで真面目に登場するという始末である。

さらにグローバルにいえば、人類はみずからの文明の成果を享受することとは裏腹に、生存しうための空間と資源の潤渇に悩み、宇宙をさまよい、海中を探り、地中を模索しているのが現状ではなからうか。

首都圏を背後にひかえる東京湾には、BOD換算で毎日1200tの汚染物質が流入しているといわれている。

人間は誰も自分の周辺だけは美しくあればよいという利己意識を持つもので、川に汚物を投げ、極端な場合には、汽車に乗っても、窓の外に空カン・紙くずなどを投げすてるなどの行為をするものである。

それはさておき、このような内陸部の汚染は、東京港に流入し、沿岸部の住民はその悪臭に生活環境を著しく損われているのが現状である。

そしてまた、湾岸では埋立地の造成が進んで、閉鎖水域をつくる結果となり、これによって、河川・運河と海域との水の交流による希釈拡散も阻害して、東京湾の水域環境を悪化させていることは否めないと思う。

地域再開発とは、高度利用によって構造物が極比することを目的とするのではなく、快適な都市空間の創造でなければならないと考える。

霞ヶ関ビルや新宿副都心などの超高層ビルの建設段階で、下水道のキャパシティを設計者・発注者は考えたであろうか。

下水道などの都市施設は、あらかじめ用意されていなければならないという認識でこれらの建設事業が行なわれたとするならば、もう改めなければならない段階にきているといえよう。

それについても思い起こすのは、先年筆者がオースト

リアのキャンベラ市バーレーグリフィン湖の水、あるいはニュージーランドのオークランド港の海水の美しさに感銘し、当局者にお尋ねした際、いずれも周辺市街地から出る汚水は、湖・港内にいっさい流入させない方が講ぜられており、人口密度その他の違いはあるにせよわが東京港の現状に比し非常にうらやましく感じたことであった。

また、ご案内の向きが多いと思うが、アメリカ合衆国のサンフランシスコ湾の浄化に対して、州政府は強力な管理開発委員会 (San Francisco Bay Conservation Development Commission) を設け、サンフランシスコ市・オークランド市など、湾周辺の人口増加や工業活動の拡大により増大する汚水の処理に、着々と有効適切な対策をとりつつあると聞き及んでいる。

すなわち、同委員会は「湾の水質汚濁に関する答申と施策」の中で、① 廃水を直接外洋に放出する、② 湾に放出する前に有毒水を処理することなどの提言をし、実施に移していることなどは、われわれにとって大いに参考になると思う。

われわれの東京港の埋立地は分流式の下水道整備を行っており、雨水は放流、汚水は処理場へと港内環境の保全には十分意をつくしているつもりであるが、内陸部からの都市汚水・企業汚水は港内を窒素・リンなどによって富栄養化し、赤潮の発生をみていることは残念なことである。

われわれとしては、さきにふれたサンフランシスコ湾の水域環境保全対策の例にみられるような湾央、あるいは湾外放出のシステムを今後真剣に考えていきたいと思っている。

いずれにしても、川や海は本来あるがままの美しさを維持しなければならないのは、だれしも異論のないところであるし、多数の人間が生活する都市は機能本位の高層化であったり、効率化であってはならず、人間本位の空間や緑の創造をテーマとしたものでなければならないと考える。

終りに、日本列島改造論は賛否いろいろな論議を呼んでいるが、筆者は、水域浄化こそ改造論の中心的な課題でなければならないと考えるしだいである。

* 正会員 東京都港湾局長